

点滴って本当に必要？

ここでは“いわゆる風邪”のときの点滴について考えてみます。

私も子供の時に高熱を出すと、点滴をしてくれる医院に連れて行かれました。このように点滴を目的に外来受診される方も多いようです。薬をもらったり、検査をしてもらおうと安心するのと同じように、点滴をしてもらうだけで安心するという心理背景があるのでしょうか。

さて点滴について考えてみます。あの点滴バックに入っている液体の正体は何でしょうか？ せつかく痛い思いをするからには、“ウイルスを殺す”“熱を下げる”“下痢を止める”薬が入っていてほしいところですよ。しかし、なんと主成分はただの水です。水に少々の塩分や糖分を加えて、体液に近づくよう作られています。まるでスポーツドリンクのCMですが、外来でよく使われる3号輸液200ml中には塩0.18g、糖8.6gが含まれています。ちなみに味噌汁一杯に含まれる塩1gやオレンジジュース200mlに含まれる糖20gにも足りません。ラグビーの魔法のやかんの中身が「ただの水」であるように、点滴のバックの中身は「命の水」ではないのです。症状を和らげる風邪薬的な成分も入っていません。ときにはビタミン剤が添加されることもあります。しかしたとえ数日間ほとんど食べられなくてもビタミンが欠乏することはなく、それでも「ただの糖入り塩水」よりビタミン入りの方がいいと言うのは、「風邪には甘酒より卵酒の方が絶対効くはずだ！」と言うのと同じレベルです。

結論としましては、点滴は下痢や高熱で多くの水分が失われ、かつ口から十分に水分を補充出来ないときにのみ必要です。とくに小児や高齢者は、そういった状況になり易く注意が必要です。また高齢者では、「食欲がない→脱水→だるい→食べられない→脱水の悪化」という負のスパイラルに陥ることがあります。そんなときのたった一本の「糖入り塩水」点滴が、悪化し続ける全身状態を一気に好転させる決定打になることもあるのです。しかし脱水にもなっていない患者に点滴をするという不要な医療行為は、医療経済的にも慎むべきです。また点滴箇所から出血したり、点滴が漏れて腫れることもあります。さらに針で皮膚を突き刺し直接血管内に液体を入れる行為は、重大な感染症の危険も伴うのです。

最後になりますが、人間の体は手術等の大きな侵襲が加わると塩分と水を蓄えようとします。恐らく風邪や仕事の疲れなどのストレスでも似たようなシステムが働くはず。当直明けの早朝に飲む温かいインスタント味噌汁は五臓六腑に染み渡り、夏の冷えたビールとは違った幸福感をもたらします。弱った体は水と塩を欲しているのです。風邪薬でも点滴でもなく、「栄養と水分をしっかり摂って寝る」これこそが副作用のない最適な“風邪治療”なのです。

(文責：高見 勇一郎)